

詩 集

滴のように

力丸瑞穂

大宮詩人叢書

力丸 瑞穂（りきまる みずほ）

- 1942年旅順に生まれる
- 大宮詩人会会員
- 「まどりがる」同人
- 現住所 〒330 大宮市浅間町 1-38

力丸瑞穂詩集 滴のように 〈大宮詩人叢書第3期⑧〉

平成元年 9 月20日発行

著 者 力丸瑞穂

発行者 宮澤章二

発行所 大宮詩人叢書刊行会

大宮市上小町209（〒331）山崎方
電 話 048-641-2717 振替 東京 2-139230

編集者 山崎 馨・廣瀧 光

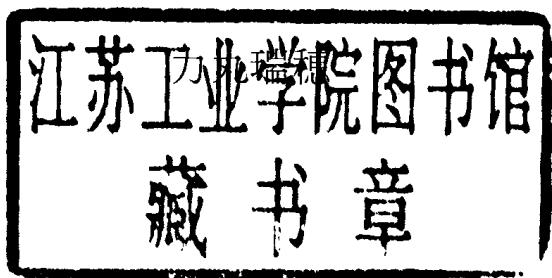
制 作 麗文社 大宮市三橋4-122-3
電 話 048-623-8417

印 刷 中沢印刷株式会社

定価 1,000円

詩 集

滴のように



滴の
ように

目次

夏の日	8
暗い記憶	10
サトウキビ	12
コロツケ	14
白い色	16
虫の声	18
あけびの秋	20
月の女	22
美ヶ原高原美術館にて	24
春の音	26
匂いの春	28

滴のように

30

骨壺作り

32

自分の首ひとつ

34

小さな村

36

海が起きる

38

湖の向こうに

40

切る

42

染まる

44

魚群

46

年のはじめに

48

あとがき

滴の
ように

夏の日

二本のわだちを残した農道が続き
おおばこが暑さにむれていた

アイスクャンディー屋の

白い旗が風にゆれて 私の

まだ一つにならない小さな妹が死んだ

私は川で遊んでいて あしたから

もう子守はしなくてもいい

と嬉しかった

なぜか

アイスクャンデーを買ってもらえない
その事の方がずっと悲しかった

開けはなたれた部屋では

死んだ妹と母だけがいて

母は白い壁に向って泣いていた

母の浴衣の桔梗の花柄が

好きだった

妹はどんな着物を着ていたのか

覚えていない

死ぬ時

やはり泣いたのだろうか

私の背中で 泣いた声をして

暗い記憶

空襲警報に追われた佐世保の町で

幾段もの石段を

母にひきずられ ひっしに登った

町には誰の姿も見えず 何故か辺りは灰色だった

逃げ込んだ防空壕に

年老いた男がじつと壁によりかかっていた

駐車場の柵にもたれて

母と私は何を待っていたのだろう

黒い貨車が一両 傷ついた

大きな獣のようにうずくまっていた

母に手を引かれ

幾つかの駅を歩いて通り過ぎた

母は何も話さず幼い私は何も聞かず

ただ一日中 歩き続けた

よそゆきの黒い革靴は 足枷のように重く痛かった

それが戦争だったのか

おぼろげな記憶のそれらの部分だけ

影よりも暗く しんとして物音ひとつしない

歩きつかれた足裏のほてり

痛みだけをいまでもはつきりと思い出すが

いまだに私の記憶について 母にたしかめていない

聞きそびれている

サトウキビ

父は夜から夜まで働いていた
母は朝から朝まで働いていた

竹の根が鋤をはね返し

松の根は土をがっしりと抱き込んでいる
うもれる程の羊歯や灌木にむかつて

朝から朝まで 夜から夜まで

父母は 鋤を打ち込んでいた

少しずつ開墾されていく荒地で

不揃いなサトウキビが ガサガサと風に鳴っていた

父と母の目を盗み サトウキビに隠れて

サトウキビを折る　その茎を噛む

父や母が気付きはしないかと

噛む音に脅え　それでも口の中にひろがる

甘い汁を吸いたかった

それが一本百円と書かれ　デパートの物産展で

三十糎程に切り揃えられ

白く乾いた切り口を見せて並んでいる

今なら誰にも気兼ねなく噛める　と思いつながら

あの働きつかれた父と母の　後姿しか見えなかった荒地畑で

口いっぱいじわっと広がった甘さを

もう味わえないと知っていた

指先でサトウキビを触りながら　買わなかった

コロッケ

「原爆の子」の映画を見たのは

小学校六年生の時だった

学校の講堂で固い床にきちんと正座をして見た

映画の中で 原子爆弾で焼かれ

熱さ 痛さに もがき苦しむ人達の

むき出しの 焼けただれた背中

ソースをかけ 少しぐちゃつとした

コロッケの衣に 似ていた

その夜から私は コロッケが食べられなくなった
コロッケの衣は

焦げくさく 血なまぐさく

喉元につまり 吐きそうになった

母に幾度も理由を聞かれたが 答えられなかった

けれど 歳月が

あの強烈な思いを

薄めてしまったのか

食べられなかったコロツケを

いま おいしく ほうばっている

たっぷりソースをかけて

箸で衣をさいたりして

あの映画 見た日から

三十三年 経っている